

第 40 号 / 2002 . 1

(財)エンジニアリング振興協会

石油開発環境安全センター

〒105-003 東京都港区西新橋 1-4-6 CYD ビル
TEL(03)3502-4447 / FAX(03)3502-3265

年頭所感

・楠田 鈺山 保安課長

設立 10 周年記念パーティー開催報告
出張報告

・リオ・デ・ジャネイロ出張顛末記

お知らせ

・事務局員の移動

年頭所感

経済産業省原子力安全・保安院
鈺山保安課長 楠田 昭二



平成 14 年の新春を迎えるに当たり、謹んで新年のお慶びを申し上げますとともに、一言御挨拶申し上げます。

昨年 1 月、産業活動の安全確保を一元的に所管する目的で原子力安全・保安院が発足致しました。原子力安全・保安院は、エネルギーの安定供給や産業活動の安定的な発展の基盤たる安全・保安を確保するとともに、国民の生命・身体及び財産を守るため、関係機関と協力しつつ、規制対象事業に内在するリスクに即して的確な規制を実施することにより、災害の発生及び被害を防止するという使命を掲げております。原子力安全・保安院ではこの使命を果たすべく、政策遂行面において規制対象事業の実態、技術開発や国際的な動向など産業保安を取り巻く環境変化を踏まえた保安レベルの維持・向上を前提とした合理的な規制制度の構築等を進めております。鈺山保安課の所管では、新たな行政需要に対応した長距離ガスパイプライン安全基準の検討、鈺山災害の防止及び鈺山防止事業の計画的・効率的実施等に鋭意取り組んでいるところであります。

昨年は、米国における同時多発テロ事件や浜岡原子力発電所一号機の事故等、保安に関わる者に深い感慨と教訓を与えるいくつかの衝撃的な事件が起きました。これらを受け、我々はまず第一に同じ事件、事故を二度とくり返さないこと、着実な原因究明、再発防止策の実施、関係機関との連携などの必要性を学びました。

我が国の海洋石油開発におきましては、引き続き大規模な災害や海外汚染事故を引き起こすことなく安定した進捗を継続しております。しかしながら、海洋石油開発が抱える潜在的リスクの大きさは言うまでもなく、我々は平時において一層有事の事態に心を配るべきであります。昨今の経済情勢等を受け我が国の鈺業を取り巻く状況は厳しい最中ではありますが、依然として鈺山保安の確保は事業活動の基礎であり、鈺山保安対策はその重要性を高めております。石油開発に携わります皆様方におかれましても、更に産業保安施策の重要性を認識して頂くと共に、国の施策に対します一層の御理解、御協力を賜りたくお願い申し上げます。

財団法人エンジニアリング振興協会石油開発環境安全センターは昨年 11 月にめでたく設立 10 周年を迎え、我が国石油開発に係る有意義な事業の実施が益々期待されているところであります。公益法人改革に係る議論が高まっている昨今、この動きを真摯に受け止め、今後更にその存在意義を高めていくものと期待しております。

最後に皆様方の一層の御発展、御活躍を心から祈念致しまして年頭の御挨拶とさせていただきます。

設立 10 周年記念パーティー開催報告

去る 11 月 5 日、石油開発環境安全センターの設立 10 周年を記念して、経済産業省・原子力安全・保安院佐々木院長をはじめとして鉱山保安課、石油公団、NEDO の関係諸機関並びに会員企業関係者多数のご出席を得て記念パーティーを開催しました。

佐々木院長からは、『石油開発環境安全センター設立 10 周年ということで、色々な活動を積重ねてこられたことに先ず敬意を表したい。平成元年に発生したアラスカでの原油タンカーの事故を契機に、海洋石油の開発に伴う環境安全問題に対して、今後は本格的に対応していくということで組織を作ろうという動きになって、平成 3 年に設立されたと聞いている。

石油及び天然ガスの開発に伴う環境安全問題は非常に大きな課題である。一方、この 10 年の間にセンターの活動の分野が相当広がったこと、特に海洋石油開発が技術的にも大深度、大水深化というなかで、各種技術を総合化していくと言う意味で、活動の内容も非常に深いものがある。

センターの活動及び今迄の実績が、我々が、現在目指している行政のなかの各分野でお世話になることと思う。

承知のとおり、今、特殊法人改革や公益法人改革等、行財政の改革が大きく取り上げられているが、必要なことは必要だと堂々と主張して



ご挨拶される佐々木院長

いく、特に、環境安全と言った面では、まさにこの分野で本当に世界の中でもきちんとしたデータと実力を持っているのがこのセンターであり、私共は規制の立場からこのセンターのいろんな諸活動に対してこれからも必要な予算は確保し、然るべくきちんに対応していきたいと思っている。今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願いしたい。』旨のご挨拶をいただいた。

記念パーティーは、旧交を温めあう関係者、設立当時の苦労話など和やかな歓談のなか、盛会裏に終了した。

出張報告

リオ・デ・ジャネイロ出張顛末記

東京大学名誉教授田中彰一先生を団長とする海底石油生産装置適用化技術に関する調査分科会一行 8 名は、平成 13 年 10 月 13 日(土) 予定より 30 分遅れの夜 7 時成田を発ちブラジル・リオに向け出発した。直前にキャンセルの 1 名を除いて予定の 8 名が参加し、とりあえずやっとう出張が実現した。いやーここまでくるのに色々ありました。

今年 6 月に開催された本年度第 2 回目の分科会の席で、海外調査の候補についてリオで開催される DOT への参加を提案したが、情報不足のせいか各委員の反応は今一つ。委員長からのご指名で DOT 関連情報収集の役目を任せられ、さら

帝国石油(株)小室拓二

に悪いことに(?) 結局出張の幹事役になってしまった。幹事役の大変さをこの時点で気づくべきであった。

調査の目的は、本年度調査の一環である ROV 関連や海底生産装置の保守・点検・補修作業等に関する聞き取り調査及び DOT 会議に参加して海底仕上げに関する最新技術情報を入手することである。順調に情報収集、訪問会社のアポ取り等の出張準備が進み、9 月 10 日(月)には、旅行代理店を交えた出張スケジュールの打ち合わせを行い、残るは社内承認のみとなった。が、翌 9 月 11 日(火)より情勢が一変した。同時多発テロの発生である。これ以降周囲が騒々しく

なり、出張承認までのドタバタが始まることとなった。

テロ発生を受けて参加予定の各社に対して参加の意志確認をする。早速、海外出張規制が始まった会社、仕事柄別段変わらない会社等それぞれの会社の特徴、対応の差が垣間見える。最終的には予定通り全員参加の返答を得て、残るは弊社の社内承認のみとなった。

9月19日(水)に出張の理由書提出。この時点で既に社内では海外出張の規制は始まっており、必要最小限の出張に限定され、特にアメリカ方面は全面禁止に近い内容であった。上司もかなり否定的であり、結局最終判断は役員に委ねられた。管掌役員に対して口頭にて説明、幹事役を強調したが、その場では理解を得られず、保留扱い。9月27日(木)夕方、会社の玄関でバッテリー管掌役員と出会ったら、「例の出張の件OK」とのこと。やっとこれで行けると思ったのも束の間、翌週10月7日(日)アフガンへの爆撃開始。連休後の10月9日(火)、担当部署からの呼び出しを受ける。石油センターの位置付け、分科会の活動内容、目的等イロハからの説明を行い、漸く納得した様子。晴れて出張が確定した。やれやれ。閑話休題。

ほとんど眠れないままロサンゼルス到着。通常のトランジットは、預けた荷物そのまま素通りのはずが、今回は一度荷物を受け取り、改めてチェックインするという、要するに入国・出国手続きを行うはめになった。手荷物にも当然厳しいチェックがあり、銃をもった軍人が待機している。しかし、予想に反して空港自体閑散としているといった印象はなく、旅行者の姿が多数見受けられた。

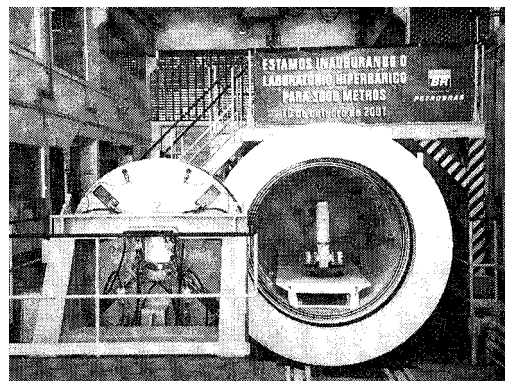
リオにたどり着くには、まだ12時間乗らなければならない。酒をがぶ飲み、眠りにつく。やっと翌朝9時過ぎリオ到着。トランジットの時間も入れて約30時間のフライトだ。13日(土)の夜成田を出発して、一日以上飛行機に乗って着いたのが14日(日)の朝。何がなんなのかよく分からない。時間の感覚が麻痺している。ホテルのチェックインまでの時間を利用して、市内観光をする。サッカーのメッカ“マラカニアンスタジアム”、巨大キリスト像が天辺に建っている“コルドバードの丘”等を見物。天気快晴、晴れ男の小生の面目躍如。昼食は名物のシュラスコ料理(大きな串に刺して焼いた肉塊を、これまた大きなナイフで削いでくれる料理)を味わう。機内食に飽きていた我々にとって少々へ

ビーだが、塩味が効いていて美味しい。3時過ぎやっとホテルにチェックイン。有名なコパカパーナ海岸に面しており、浜辺では老若男女がカラフルな衣装で遊んでいる。疲れてはいたが、気合いで早速海パン姿で散歩。水が冷たい。日本の裏側に来たんだ。この青空、砂の色、派手な水着、ここはブラジルを実感!。眠気が吹っ飛んだ。さて明日から会社訪問だ。DOTが始まるぞ。

15日(月)は、CSO(Coflexip Stena Offshore)社を訪問した。会社はリオの中心街にあり、人通り

が絶えない。が、現地の人間から昼間でも危険というアドバイスがある。事前の打ち合わせどおり、ROV作業関係の情報について準備されており、スムーズに話しが進んだ。窓口であるナターシャ嬢は、以前オーストラリアのパーズにおいて、我々の開発計画を知っていたことから、説明者もそれを意識したものであり、建設時も含めたROV作業を中心に、支援船関連等でも有益な話を聞くことができた。

16日(火)は、Petrobrasの研究所であるCENPESを訪問した。こちらの質問等は日本のPetrobras Japanの川上氏を通じて伝わっており、海洋基地の生産拠点であるMacaéから3名のエンジニアを呼んでもらっていた。円盤状の建物の中心にある社員食堂でビュッフェスタイルの昼食をご馳走になる。あんな細身のかわいい子もいやー食べる食べる。我々の倍のボリュームだ。昼食後、当日竣工式典が行われた水深3000m環境で機器をテストするための加圧装置の説明を受ける。数十センチ肉厚の横置き円柱状ベッセルで、各種計器に加えて3次元対応の監視カメラを備えた世界最先端技術の装置である。私の感覚からすると、この種のテスト装置はメーカーが製作して、各種機器を試験するものだが、Petrobrasは自分たちで検証しようとしている。まあ相手が3000m水深、自分たちで



水深3,000mでの開発を目指す高圧実験装置

やるしかないかと納得。

その後、カンボス沖で展開される海底生産システムに対する ROV 作業や保守、点検・補修等についてフレキシブルパイプラインの検査も含んだ説明を受け、更に実際の海底パイプラインの油漏れ補修ビデオも鑑賞でき、有益な関連情報を入手することができた。最後に案内役であり、メル友でもあったベラ女史に日本土産を渡して、Petrobras 訪問を終えた。

17日(水)は DOT の初日。ホテルから車で1時間弱の DOT 会場に到着し、早速参加申し込みを行い、会場内に入る。申し込みは、最悪不参加も考えて事前には行わず、会場で直接行うことにしていた。かなり規模の小さい OTC(Offshore Technology Conference)といった雰囲気、早速オープニングセッション会場へ。建物に隣接して設営された仮設テントでの開催宣言。中央の演壇に加えて3方にスクリーン、スピーカーが設置されており、どこからでも講演者の話が聞ける。ざっと見渡して約500名の参加か。各メーカーの展示ブース(72社参加)があり、また、技術発表はテーマ別に3箇所の会場に分かれて行われた。Well Engineering 関係、Floating Facility 関係、Flow assurance 関係、Subsea 関係等合計27項目のテーマ(81ヶの発表)があり、各自興味のあるテーマに分かれて聴取し、最新のデープウォーターに関連する石油開発技術に触れることができた。



Deep Offshore Technology 会議場前

18日(木)の午後に訪問を予定していた DSND-Consub 社への聞き取り調査は、DOT 会場で行うことができた。出発前に都合で訪問先が変更になり、あまり聞き慣れない会社であったが、我々の認識不足であった。北海を中心に活動しており、また、近年ブラジルにおける ROV 作業で実績を挙げている会社で、会場には実物の ROV を展示していた。海底生産システムを含む ROV 作業及びその支援船関係等の実務的な有益情報が得られた。

DOT は19日(金)までの3日間開催され、何事もなく無事終了した。約1週間の短過ぎるブラジル滞在であったが、リオ最後の夜には、これまでの団体行動をやめて、各自の好みに応じて自由行動となった。サンバショー組、キャバレー組、奇特にもホテル直行組と。どうもサンバショー組が一番楽しんだようであり、翌朝のIさん、Kさん、Tさん、Wさんの表情からは、ある種の満足感が漂っていました。

かくして、20日(土)深夜リオを発って帰国の途につき、ロスでの入出国を経て、翌々日の10月22日(月)午後成田に到着した。

終わりに、今回の出張を通じて技術的な知見以外にも参加メンバー同士の親睦も深まり、分科会を離れても情報交換できる関係を築けたことが大きな収穫であり、本当に一生の記念になる出張となった。この機会を提供して頂いた石油開発環境安全センター並びに参加を承認して頂いた会社関係者に深く感謝したい。



DOT 会議展示場

お知らせ

1. 事務局の移動

- ・9月30日付 退任 奥村 康夫 (前技術調査部長 復帰先: エジプト石油開発(株))
- ・1月1日付 着任 菊田 勝彦 技術調査部 研究主幹 (株大林組より出向)